



古

典故語は、江戸から明治にかけての噺が中心である。当然、時代に合わせて変化はしているが、人物の風体、大道具、小道具類は、替えてしまおうと噺が成り立たなくなることも多々あつて要注意。

子どもたちに落語を教えていて、知っているものとして話していたらどうも反応が鈍いので、聞いてみると「それ、なーに？」ということがある。この間も噺の重要アイテムの扱いをやつきになつて教えていたら、見に来ていたお客さんに、
「知らないんじゃないの？教えてやらないとわからないわよ」
と言われてハツとした。

「えつ、ワラジつてどんなものか知らないの」と問うと、決まり悪そうにうなずくので猛省した。もつと早くにここに気づくべきだったのだ。

物心つくと、寝間着（パジャマではない、念のため）を尻からげして、家の中を走り回り、岡つ引きに成り切っていたザ・昭和の子どもなど、もうどこにもいないのだ。精神の半分が時代劇で形成されたばかりは、ワラジを知らないということがわかには信じがたいのだが、今の子どもたちは時代劇に触れる機会などまずない。

ある、まぬけなどろぼうの噺。成績が上がらないの

で親分からクビを言い渡されたが、頼み込んで起死回生の盗みに出かける。忍び込んだところまではよかったが、重めの壺に目を付けたら落として割ってしまった。そこからのドタバタ劇が楽しい噺である。これも子どもが演じているうちに、どうも、イメージされていないようだ。私もそして稽古を見に来ていたお客さんも気づいた。無理もない。紐で紙の蓋が結わえてある壺など、日常で見ることなどないのだから。となり
の通りから来てくれたおばさんが言った。

「うちにちよūdい壺があーけん（あるから）今、持ってきてあげーわ（あげるわ）。そーに（それに）新聞紙張つてビリビリつて破つてみーだわ（みてごらん）」

保護者が恐縮していると、
「いーけん、いーけん（いいから、いいから）、好きなほど練習して、終わつたらうちの前に置いちゃいよて（置いておいて）ごしなりや（くれたら）いーけん」とすぐに立ち上がつて取りに行つてくれた。

ここにも昭和の風物が継承されないことを惜しむ人がいた。味噌醤油のやりとりというのとは違うけれど、何だかいいなあ、いいなあ、とこの光景を眺めたのだ。この子、寄席の本番では、想像の壺を見事に扱つてみせた。

北海道への旅、三度目
木幡智恵美

5

旅行に出る前にやつておかねばならないことがいくつあつた。まず、畑に秋野菜の苗（白菜、キャベツ、ブロッコリー）を移植すること。「白菜は九月の十日前後に植えんと巻かんぞ」と亡き伯父に教わっていたのだ。それから、寛大と実歩を松江歴史館と松江城に連れて行く約束をしていたので、「みんなの小学校」の企画展が終わるまでに行くこと。そして、出発前のぎりぎりに届くことになっているシャインマスカットを新潟の義妹宅と茨城の叔母宅に送ること。細々したことでは、冷蔵庫の冷蔵室と野菜室にあるものを使い切ること、持つて行く食料を買つておくことなど。畑では、無事白菜、キャベツ、ブロッコリーの苗を植え、ダイコンの種も蒔いた。旅行中にはいい間隔で雨が降つてくれるのを祈るだけだ。

冷蔵庫の品はあらかじめ片付き、残ったチーズやジャム、ウインナーは冷凍庫に入れる。キャベツの保存についてネットで調べたところによると、千切りにして保冷パックに収めて空気を抜くとうまく冷凍できるとあつたのでその通りにした。

そして、いよいよ旅行前日、仕事に行く途中寛大と実歩を我が家に連れて来た娘は、頼んでいたシャインマスカットも置いて行った。前日から準備していた箱にシャインマスカットと手紙（家を空けるので、着いたら携帯電話の方に連絡を入れるよう付け加えた）を入れ、歴史館に行く前に郵便局に寄つて送った。寛大と実歩には、「暑くなりそうだから、松江城の方を先にしよう」と言つて四人で駐車場からお城方面に歩き出す。途中「JAFカード持った？」と夫に聞くと、「あつ」と言うので駐車場まで取りに行った。カードだけを取ろうと思つたけれど、免許証ごと持つて行ったのが正解。お城の入り口でチケットを買おうとJAFカードを見せると、免許証を見た受付の人が、「松江市に住む高齢者は無料ですよ」と言われる。市内の小中学生も土曜日は無料で、四人とも無料となった。兜や鎧を見るのを楽しみにしていた寛大は、城の中で見つけられずがっかりしていたが、歴史館にあり、「剣も銃もあつたよ」と喜んでいた。実歩は「みんなの小学校」展示場のお絵描きボードにはまっていた。

30代フリーター 朝日新聞社が毎年、憲法記念日の前にしている世論調査（郵送）によると、今年も憲法9条を「変えるほうがよい」が32%（昨年37%）、「変えないほうがよい」61%（同55%）で、1年前にくらべて改正賛成派が減り、反対派が増えている。年金生活者 防衛費の大幅増額や敵基地攻撃能力の保有、自衛隊と米軍の一体化など武張った政策を進める岸田政権に対し「慣れない突っ張りをやっている」と、そのうち痛い目に遭うぞ」と、国民が手綱を締めにかかった結果と考えられる。

30代 ただ、昨年の「変えるほうがよい」の37%は「2013年に郵送調査を始めて以降、同年に次ぐ2番目の高さ」（2023年5月2日朝日新聞デジタル）で、2014年から22年までは「変えるほうがよい」は30%前後で推移していた。だから、今年は元に戻っただけとも言える。

年金 ロシアのウクライナ侵略に危機感を覚え、「やっぱり9条は変えたほうがいい」と考える。自衛隊や日米同盟が万能でないのと同様だ。それでも、「日本防衛に支障がある」よりも「戦争をしないで済んだ」が上回ったのは、両方のリスクを比較して判断した結果だろう。9条を変えれば、戦力の不保持による「安心供与」、すなわち目に見えない「抑止力」が失われ、リスクのほうが増大する、と国民は考えていると推察される。

30代 今回の調査ではソーシャルメディアについて初めてまとまった質問している。偽情報の選挙への影響を心配したり、他人への誹謗中傷を気にしたりする割合がいずれも8割を超え、規制が「必要だ」という回答が85%におよんでいる。

年金 その背後には、ソーシャルメディアのプラットフォームなどを提供している巨大IT企業の強化に対する不安があると推定される。

ソーシャルメディアを含め、巨大IT企業がネット上に築いた通信、情報検索、決済などのプラットフォーム

うがいいかもしれない」と思っていた国民が、時間がたつて状況が見えてくるにつれ、むしろ軍備増強に前のめりになる岸田政権に危うさを感じるようになったと推察される。

憲法9条のうたう戦力の不保持がこれまで目に見えない「抑止力」として働いてきたと感じている国民の目には、岸田政権のしていることはその「抑止力」を削ぐものと映ったに違いない。「戦力を持たない」と宣言した国は、日常生活にたとえると、赤ん坊のようなものだ。その無防備さが大多数の人びとを「この子を守ってやらなければ」という気持ちにさせる。ただし、ごくまれに危害を加える者もいるので、その接近を阻む備えが自衛隊と日米同盟にほかならない。

専門家ではない国民は、そうやって自らの日常の人間関係から類推して国際政治をとらえる。職場でも近隣でも親戚づき合いでも、すべての相手に100%心を許してしまえば、いつ足をすくわれるかわからない危険があ

は、それなしには個人の生活も企業の活動もほとんど成り立たないほどのインフラとなつている。それは無料で提供されているように見えるが、その利用にもなつてあらわになる個人の行動特性などの情報は広告に活用され、

る。だからといって、いつも突っ張った態度をとつていては、周りがみな身構え、衝突の危険が増す。であれば「適度な無防備」こそ一番いい。それを原則に人づき合いをしているのが大多数の人びとだ。

30代 調査は、9条をめぐるふたつの代表的な意見をあげて、どの程度共感するか4択で尋ねている。それによると、「いまの9条があることで戦争をしないですんできた」という意見について「共感する」が「大いに」（21%）と「ある程度」（55%）を合わせて76%にのぼっている。

一方、「いまの9条では日本防衛に支障がある」との意見に対しては「共感する」が「大いに」（12%）、「ある程度」（47%）を合わせて59%だった。「あまり」「全く」を合わせて37%だった「共感しない」を上回っている。

世論にねじれがあるのではないか。年金 当然だろう。9条さえあればあらゆる戦争、あらゆる侵略を防ぐことができるということなどあり得ない。

巨大IT企業の利益になつている。

プラットフォームの利用者は、ただで利用していると思いつながら、実は企業にただ働きさせられている、とマルクス・ガブリエルは指摘し、それを「デジタル全体主義」と呼んで、徹底的な規制を主張している。しかし、巨大IT企業はすでに「もうひとつの国家」と化しており、政府が民間企業を規制するのと同じ手法がどこまで通用するか疑問だ。

既存の国家を規制している代表的な装置は憲法と議会だ。巨大IT企業に対して、それらに相当するものを築けるかどうかが問題になる。もしそれを実行に移すとすれば、その主体はプラットフォーム（インフラ）の利用者でなければならぬはずだ。しかし、利用者はバラバラの存在で、大きなひとまとまりの力にはなっていない。だから、最初のうちは既存の国家が主体にならざるを得ないかもしれない。民主制に移行するのに絶対王政を経なければならなかったように。

ニュース日記 921
中村 礼治

世論調査を読む